

数年後そのルーツを辿りスペイン、ポルトガルへ向かった。

<その2>旅慣れない頃はやたらと荷物が多い。気候や場所柄を考え、特に衣服が増える。女性の場合特にそうだ。しかし海外で見かける人々は様々だ。日本のように一斉に半袖になることはない。電車の前に坐った二人、Tシャツ、片や毛皮という例もある。要は他人の目ではない。自分が心地よければ。ハッとする程きれいなパリジェンヌが骨が折れ半分ダラリと垂れ下った傘をさしていた。似合わないなあ。いや、いいんだ、他人に迷惑をかけてるわけじゃない。一人で納得した。

<その3>ベルギーのある高校の先生のお宅にホームステイをした。無駄な物がない家だった。夕方の一定時刻になると小さい子供達が居間に並んで坐った。父

親がやおら戸棚をあけてテレビを取り出した。スイッチを入れ子供達は人形劇か何かの番組を楽しんだ。30分程で終わると父親はパンパンと手を打ちテレビは再び戸棚の中にしまわれた。子供達は満足げであった。

<その4>ニューヨークっ子の人気のステーキハウスはその日も混み合っていた。先程より、パンの取り皿を、ワインのおかわりを、何度頼んでもウェイターは返事ばかりで持って来ない。忙しそうだからもういいですよと私は同行したM・ロンドン夫人の袖を引いた。「言う事は言わなければ。ここはアメリカよ」と彼女は言った。マネージャーが出て来て名刺を差し出しながら「悪かった。次は私が応待します」と。一人前ゆうに1ポンドはあった食べ残したステーキをドギーバッグに包んでもらいその店を出た。

(留学生指導主事・経済学部講師)

私の日本人論 (第5回)

日本は素晴らしいか？

YAMAZI HIROAKI
山路 裕昭



ゼミ室にて(最後列が筆者、前列左から2番目が
ミャンマーのミョーさん)

教育学部では、教員研修留学生制度に基づいて、主として発展途上国から小・中・高校の現職教員や教育関係者を毎年2～3名受入れて、1年間の研修の機会を提供している。受入れを始めて既に10年あまりを経過し、制度としては教育学部にはほぼ定着していると言えよう。

理科教育を専門とする私も、縁あって、これまでに3名の教員研修留学生の指導を担当してきた。また、私の所属する理科室全体でも、これまでに10名あまりの現職理科教員を留学生として受入れており、今年度も2名の留学生を受入れている。

ところで、理科関係の教員研修留学生から、これまでに何度か次のような決意(?)を聞いたことがある。それは、「日本は経済的に繁栄しており、その理由の一つは、高度に発達した科学技術である。」「日本の科学技術が素晴らしいのは、日本の理科教育が素晴らしいからであろう。」だから、「日本の進んだ科学技術と理科教育を学び、母国の発展に貢献したい。」というものである。

わが国の理科教育関係者の一人として、これは誇っていいことであろうし、おおいにわが国の科学技術や理科教育について学んでいただきたいと思う。だがし

かし、そうは思うものの、留学生のそのような発言を聞くにつけて、何か欲求不満と一抹の不安を覚えるのも事実である。

我々日本人は、わが国の科学技術を本当に誇れるのか？わが国の科学技術は、人類の幸福に本当に貢献してきたのか？わが国の理科教育は、真に子どもたちの成長・発達に貢献しているのか？入学試験のための理科教育ではなかったと、断言できるだろうか？……

わが国の科学技術や理科教育に対する留学生の熱い思いを目の前にして、にこやかに微笑むと同時に、心の中に割り切れないものがある。

日本の良いところだけでなく、悪いところも見てもらいたい。過大評価でも過小評価でもなく、正当な評価をしてもらいたい。これは、多くの日本人の正直な気持ちであろう。そして、それを留学生に求めることが、案外に難しいのである。否、私たち自身も、自分の目、自分の心で、さまざまな事象を正当に評価することが、実は出来ていないかもしれないのである。

(教育学部助教授)